

五
段
鈔

底本

森英純 校註本

昭和四十年六月三十日發行

西山淨土宗教學部

対校本

文政四年木版本

西山上人五段鈔

夫れ速かに生死を離れんと欲はば浄土の一門に依る可し。

之に付きて即ち五段有り。一つには穢土を厭ひ、二つには浄土を欣ひ、三つには三心を具し、四つには念仏を行じ、五つには念仏の益を明す。

第一に穢土を厭ふとは

經に曰く「世尊復た何等の因縁有つてか提婆達多と共に眷屬と爲り玉へる……閻浮提の濁悪世を樂はざる也。此の濁悪の処には地獄・餓鬼・畜生盈ち満ちて不善の聚多し云云」と。

『定善義』に云く「娑婆は苦界なり、雜惡同居して八苦相ひ焼く。動もすれば連返を成じ、許り親しみて笑を含む。六賊常に随つて三惡の火坑に臨臨として入りなんと欲す云云」と。

① 云云 〓 側註「云云一本作レ云」

② 云云と〓なし

誠に三界は有為の栖霞^①、無常迅速の境なり。出づる息入る息を待たず。念念に三惡の果報顯れんと為^す。四生無常の形、生有る者は死に歸す。哀れなる哉電光の命、草露の朝を待つが如し。悲しい哉風葉の身、權華^②の朝にして夕べにいたらざるに似たり。五蘊の仮舎^③に旅客の主、六趣を指して中有に生を求む。幽魂は無常^④にして独り逝き代れば、質^⑤は山沢に残り骨を野外に曝す。

人中・天上の快樂は夢中にして幻の如し。八苦の悲しみ忽ちに來り、五衰^⑥の患へ速かに到る。地獄・畜生の果報は業に依つて感ず。八寒・八熱の苦しみを受け、殘害・飢饉の患へ有り。或は鉄杖骨を擡^⑦ぎ、刀林膚を割く。眼には獄卒阿榜^⑧の噴質を見、耳には罪人叫喚の声を聞く。是の如く火・血・刀の苦しみ間無く億億万劫にも出で難し。

愚なる哉。一旦の名利に依つて永く三途の沈淪を受けんこと。拙い哉。此度生死の苦海を出でずんば未來何んが菩提の彼岸に到ら

① 家「來」

② 側註「已下十七字異。無又云有二字」

ここで十七字とは

「無常迅速く三惡の果報顯れんと為」なり。

③ 息「なし」

④ 顯れんと「を」

⑤ 權華の……似たり「似權華不投夕」

⑥ 舍「側註「舍異作共」

⑦ 「阿」は「呵」に通ず

ん。

かるが故に三界六道を厭ひて常樂の門に入るべし。

第二に淨土を欣ふとは

西土の韋提希夫人、娑婆の依正を捨て、他方の淨土に往生せんと欣ふに依りて、如来十方の淨土を説きたまへりと雖も、諸仏の淨土は垢障の凡夫は入り難き故に、九方を捨てて西方の一土を選ばしめたまへり。

然れば積には「一切の仏土皆嚴淨なれども、凡夫乱想にして恐くは生じ難し。如来別して西方の国を指し、是れより十万億を超過す」と云へり。

西方淨土に就きて亦三つの異り有り。一つには内心の西方、二つには心外の西方、三つには別所求の西方なり。

初めに内心の西方とは真言に言ふ所の妙觀察智の弥陀なり。自身即ち是れ仏の住処、身土不二にして心外に仏土無しと云云。

① 土「側註「土異作」方」

② ばしめたまへり「側註「び」

③ 積には「なし」
『法事説』の積文

二つに心外の西方とは、天台の觀經の積に、西方は正念の方と云へり。然りと雖も応身同居土と判ず。余師も亦之れに同じ。

三つに別所求の西方とは報土なり。之れに就きて二つの心有り。

初めに独勝の土、此れ則ち莊嚴精華にして十方に超過する故に、余方を闊きて独り極樂の勝れたるを取る。

次に別願成就の土、是れ即ち垢障の女人、罪惡の衆生の爲めに感成したまへる報土なり。

此の報土に生るることを欣ふ心を願生の心と云ふなり。

第三に三心を具すとは

上と言ふ所の願生の心は依報に向つて発る。今の三心は行体に付きて発る心なり。

三心とは經註1に云く「一つには至誠心、二つには深心、三つには廻向發願心なり。三心を具すれば必ず彼の国に生る」と云へり。

積註2に曰く「此の三心を具すれば必ず生るることを得るなり。若し

①の方「無一

天台觀經妙宗鈔

「令心想正趣西方故云用標送想
之方」

註1 『觀無量壽經』上品上生の文

註2 『往生禮讚』の積文

一心も少^かけなば即ち生るることを得ず」と云へり。

『選^註1 撰集』に曰く「念仏の行者は必ず三心を具せよ」と。

浄土の門徒不同にして異義^註2 区^註3 区なり。然るに今言う所の三心は、先師（源空）の書の中に云はく「三心は念仏の行に付きて発る、余行に向つて発る心に非ず云」と。

初めに至誠心とは積^註2 に云く「至とは真なり、誠とは実なり」と、
真実の心なり。真実の心とは正直の心なり、正直の心とは蔽^註3 蔽らざる心なり。法蔵菩薩の、因中にして六度万行を選び捨てたまひし心は
真実なりと知るは我等が真実なり。別に、法蔵菩薩の御心を離れて
真実を尋ねべからず。何を以て知るとならば、願に「十方衆生至心
信樂」と誓ひたまへる御心に、其の至心とは、今我等が真実と成
るべしと意得るは凡夫の真実なり。虚仮の諸善にては、本より本願
の土には生れずと知るを正直の心と云ふなり。叶ふ事をば叶ふと知
り、叶はざる事をば叶はずと知るを真実と言ふなり。法蔵菩薩の真

註1 三心念仏章の標章の取意

① と「云云」とあり

側註「云云無異」

② 区「なし」

区は「まぢまぢ」

註2 散善義

③ 蔽「側註「異作飾是也」

④ ひし「ふて」

実の御心を知れば、我等妄想著心を離れて真実の心と成る。其の著心とは、妄念を離れ、三業を清くして諸善を励み、得生せんと欲ふ心を云ふなり。此の執心を離るゝを離著と云ふなり。喩へば、木を折らんと欲するに、撓むと雖も弱力にして折ること能はずと知れば、心身を煩はさず。凡夫は雜行の力弱くして、煩惱の樹を折らんと欲するに、三毒強くして折ること能はずと知るを、真実心と云ふ也。

我等の不真実とは積つに「外には賢善精進の相を現して、内には虚仮を懐くことを得ざれ、貪瞋邪偽奸詐百端にして、悪性侵め難く、事蛇蝎に同じ」と云へり。亦、縱使一形三業を励まして、煩惱も間へず、清淨に行ずるとも、此の行を以て彼の淨土に生れんと廻向すれども、尚ほ不真実の行と成るべし。何を以て知るとならば積つに云く「縱使身心を苦勵して日夜十二時に急走急作して頭然つねんを灸ふが如くすると、衆べて雜毒の善と名づく、亦虚仮の行と名づく。真実

註 1 散善義

至誠心積の文

註 2 散善義

至誠心積の文

の業と名づけざるなり」と

喩へば人有つて意趣を存す。我に道理有りと執すれども、其の執心を翻して、往生真実の仏心に順ずれば、我心は即ち真実の心なり。

上来語は重れども、諸悪を流転の業と知り、諸善をば虚仮の行と知りて、善悪の言に順はざるを真実の心と言ふなり。是くの如く意得れば、弥陀真実の御心と差別無し、故に真実と言ふ。

又真実の心を発しぬれば、誠に娑婆を厭ひ、浄土を欣ひ、悪を止め善を行じて、一切菩薩の如くならんと思ふべし。故に至誠心と名づく。

二には深心、深心と言ふは即ち是れ深く信ずるの心なり。其の深く信ずる心とは、本願に「信楽」と云ふ信なり。是の信を意得れば仏の願意と差別無し。此の信の一つを機法の二に亘すなり。

初めに機を信ずとは積積に云く「一つには決定して深く信ず。自身

①くならん「し」

註1 散善義

深心積の文

は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫より已來常に没し常に流轉して出離の縁有ること無し」と云へり。今罪惡とは、五逆・十惡等の罪を言ふなり。五逆とは父母を殺し、阿羅漢を害し、仏身より血を出だし、和合僧を破るなり。十惡とは、身には殺生・偷盜・邪淫の三つの失を犯す。口には惡口・兩舌・妄語・綺語の四つの罪を作る。意には貪欲・瞋恚・愚痴の三つの惡を發す。此れを十惡と云ふ。此等の罪に依りて無始より已來生死に流轉せり。故に常没常流轉と云ふなり。其の常没と言ふは『涅槃經』の中に恒河中七種の衆生の喩へ有り。第一の衆生は水底に沈みて浮べる時無し。此れを常没と云ふ。釈尊の利益に漏れて地獄を出でざる闍提人に喩へたり。

然る間、今闍王・調達の逆人、韋提・未來の女人、是の如き等の貪瞋具足の凡夫を常没の衆生と云ふ。之れに依りて、罪惡生死の凡夫、機として六道に流轉す。又善業の行と雖も不真實の行なる故に、今生も生死を離れず、過去も出離せざりきと深く信ずれば、至

① 失 側註「失作し過」

註 1

『大般涅槃經』卷第三十六の迦葉菩薩品第十二に恒河中の七種沈没譬がある。

七衆生とは所謂

- 1 常没人
- 2 暫出還没人
- 3 得住人
- 4 觀四方人
- 5 遍觀已行人
- 6 行已復住人
- 7 到彼岸人である。

誠心は深く成るなり。

然れば善悪共に輪廻の業にて、往生の益を得ざる故に、出離の縁あること無しと云ふ。此れを信機と名づくる也。

次に法を信ずと云ふは積①に云く「二つには決定して深く信ず、彼の阿弥陀仏、四十八願をもつて衆生を撰受したまふ、疑ふこと無く慮ること無く、彼の願力に乗じて定んで往生を得云」と。

決定とは、先づ機に付けて、上の如く決定して十悪・五逆・四重・八万四千の煩惱罪障等、皆三途の業因にして出離の縁有ること無しと信ず。

次に仏に決定を付くれば、三毒常没の凡夫を、法蔵菩薩の本願を以て撰取して正覚を成②せんと誓ひたまふ願なりと信ず。此の弥陀の誓願決定せる処を、積尊出世して此の誓願決定なりと説きたまふと信ずるなり。又六方③の諸仏、決定して往生すべしと、舌相を舒べて証誠したまふと信ずるなり。

註 1 散善義

深心積の文

① ぜ「ら」
② の「れ」

③ 六方の諸仏「なし」

所詮弥陀の本願と云ふは、決定して、五逆の衆生五障の女人を撰取して、五智五眼を成就せしめたまふ誓願なりと信じ、決定して八万四千の塵勞門を転じて、八万四千の相海と成らしめんと誓ひたまへる誓願なりと信ず。然りと雖も決定誓願の体は、南無阿弥陀仏の一体と顯れたまへり。

此くの如く信ずる行者の信心、即ち仏願に決定して納め奉る心を南無と云ふ。南無とは帰命なり。帰命とは願力を信ずる意なり。此の帰命の信心を決定して撰取する処を「阿弥陀」と云ふ。「阿弥陀」とは慈悲深重の御意なり。此の御意を誓願して、衆生を撰取して成じたまへるを仏とは云ふなり。「仏」とは覺なり。覺とは智慧なり。是を不思議智と名づく。此の智を意得れば即ち我等が覺体なり。是の故に、釈迦・諸仏共に南無阿弥陀仏の覺を持ちたまふなり。

然れば即ち阿弥陀仏と釈迦仏と諸仏との智慧は我等が覺と決定して、一覺三昧を成ずる故に、能覺所覺共に一体と極るなり。爰に衆

① 信じ「なし

② しめ「なし

③ 阿弥陀「阿弥陀仏」

④ 意「心」

⑤ 即「則」

⑥ 阿「なし

⑦ 三昧「側註「異無」

生は仏の願力に依りて往生を成じ、弥陀は衆生の信心に依りて正覺を顯す。然れば往生を離れて別に仏の正覺も無く、仏の正覺を離れて往生も無しと信ずるなり。故に『礼讚』^{註1}には「彼の仏今現に世に在して成仏したまへり。当に知るべし、本誓の重願虚しからず、衆生称念すれば必ず往生を得」と云へり。「彼の仏」とは本願を指す。「今現」と云ふは、我等が罪悪苦悩に正覺を成じたまへる処を「在世成仏」と云う。故に『玄義』^{註2}には「今既に成仏したまへり、即ち是れ酬因の身なり」と云へり。此の正覺の体を「衆生称念すれば必ず往生を得」と云ふなり。是の如く意得れば、我等願力に乗じて決定往生することを、疑ひ無く、^{おもんばか}慮り無く深く信じて、仮令ひ顕密の諸宗の学者、或は声聞・縁覺・地前、地上の菩薩、或は化仏・報仏等の来りて、重々に難破を致して、凡夫は往生すべからずと難ずとも、少しも驚動せず、深く信ずるを深心と名ずくるなり。

三に廻向発願心とは、^{註3} 釈に云く「廻向発願心と云ふは、過去及び

① 衆々なし

註1 『往生礼讚』

第十八願の釈文

註2 玄義分

二乘種不生の釈

註3 散善義の釈

今生の身・口・意の業に修する所の、世・出世の善根、及び他の一切凡聖の身・口・意の業①に修する所の、世・出世の善根を随喜せる等云」と。

廻向とは廻り向ふ心なり。其の故は、弥陀は万行を成して衆生に向ひ、衆生は彼の行体に廻り向ふ時、所修の行体無二なる故に、本願には「欲生我国」と云ふ。故に上に明す所の「願生彼国」の願は、至誠心に捨つる所の、日夜十二時急走急作等の虚仮雑毒②、深心に簡ふ所の諸行、専雜二行は、仏の兆載永劫に万善万行成就したまへると差別無しと随喜して、彼の国に生れんと願ずる故に、廻向発願心と言ふなり。

此の願③と云ふは、帰命なり。帰命とは即ち南無阿弥陀仏と極るなり。是の如く意得れば、大慈大悲の心発るなり。慈悲とは仏心なり。仏心と言ふは哀愍衆生の心なり。

又此の廻向心を意得るに、大いに分ちて三つと為す。

①の業「なし」

②虚仮雑毒「虚仮雑毒は」

③万善万行「万行万善」

④云ふ「なし」

一つには、弥陀因中に行じたまひし六度万行、三業の御功德は、我等が三業と差別無しと感得したまひけりと随喜す。

二つには、我等が迷情の三業、即ち仏の三業と転じて、差別無く相応して、親近の功德を具足すと随喜するなり。然れば弥陀の身心障碍無くして衆生の身心に遍くして無碍なる故に、衆生の十悪五逆、女人の五障三従転ぜられて、八十種好と成り、三十二相と顯る。故に衆流海に入りて一味と成るが如し。故に經註1に云く「諸仏如来は是れ法界身なり。一切衆生の心想の中に入りたまふ。是の故に汝等心に仏を想ふ時、是の心即ち是れ三十二相、八十随形好なり。是の心仏を作る。是の心是れ仏なり」と云へり。釈註2に云く「此の心を離れて外更に異仏無し」と云へり。譬へば水月の如く感応成就したまひけりと随喜するを廻向と云ふなり。

三つには身・口・意の世・出世の善根に随喜す。

之に就きて、我等が三業即ち父母の三業なる故に、我が三業を転

① と「に」

② すと随喜なし

註1 『觀無量壽經』 第八像觀

註2 定善義 第八像觀の釈文

じて仏体と隔て無き故に、父母即ち転ぜられて往生を得。之に依りて真実の孝養と成ることを随喜すべし。

尚ほ父母の恩に二種有り。世間と出世との恩徳なり。其の恩徳と云ふは、釈すつに云く「若し父無くんば、能生の因即ち欠けなん。若し母無くんば、所生の縁即ち乖そむきなん。若し二人俱に無くんば、即ち託生の地とらを失ふ。要す須らく父母の縁具して受身の処ことわり有るべし。

既に身を受けんと欲す。自らの業識を以て内因とし、父母の精血を以て外縁と為す。因縁和合する故に此の身有り」と云へり。密教には左の手足は父の五臓頭れて五指と成り、右の手足は母の五臓頭れて五指と成る。乃至眼耳鼻舌等も皆半身なりと云へり。

今此等の文に付きて恩と孝との二つの心有り。此の恩・孝又世・出世の二に通ずべし。

世間の恩・孝とは、身体髪膚⑥を受くるは恩なり。毀傷せざるは孝なり。尿に臥し尿に眠り、麻頂④を被り、泉を費やし、上味を授け、

註 1 序分義

散善頭行縁の釈文

① と云へり〳〵なし

② 成り、……五指と〳〵なし

③ 舌〳〵なし

④ と云へり〳〵なし

⑤ 世間の恩・孝とは〳〵「恩孝と云は」

⑥ 髪〳〵なし

⑦ は〳〵なし

⑧ は〳〵なし

⑨ 麻〳〵「摩」

家業を与ふるは皆父母の徳なり。菽水①の志を抽んでて顔色を喜ばしめ、紅涙を流して恩徳を悲しむは、惟れ存亡の孝なり。然れども恩は二華嶺にかれいよりも高し、志は蟻垤ぎてつに似たり。故に『心地観経註¹』に云く「慈父の恩高きこと山王の如し、悲母の恩深きこと大海の如し」と云へり。『四分律註²』（行事鈔）に云く「仏諸の比丘に告げたまはく、若し人有りて百年の内右の肩に父を担ひ、左の肩に母を担ひ、上に於いて大小便利せしめ、世の珍奇衣服を極めて供養すとも、猶ほ須臾の恩をも報ゆること能はじ。心を尽し寿を尽して父母を供養せざれば重罪を得ん」と云へり。縦ひ一旦の恩を報ずと雖も、流転の恩は妄執の法なる故に、誠に拔苦の孝順に非ず。然れども孝有れば則ち感有り、報有れば則ち徳有り、当に位を昇り富貴を感ずるが如し。

次に出世の恩孝といふは、父母の精血を得ることは恩の始めなり。我が往生に依りて、父母の三業を転じて往生せしむれば、惟れ

① 菽水「水菽」

註1 『大乘本生心地観経』の略称
報恩品の偈文

註2 対校本の欄外の註には

「四分律已下五十三字律不見。

父母恩難報経云右肩負母経歴千年更使便利背上一

弥沙塞律云仏言從今聽比丘尽

心尽寿供養父母若不供養得

重罪」とある。

とある。

南山道宣の『四分律刪繁補闕行事鈔』卷下三生縁奉訊法に五分律から引用した文である。

② 父を……左の肩に「なし

③ 上に……便利せしめ「上於大

小便利」

④ ん」と云へり「ると」

⑤ 然れども「なし

則ち孝順の始めなり。

抑も我等無始已来、生々世々二親骨肉の恩を受くると雖も、或は不孝にして深重の恩を報ぜず、或は孝順を行ずれども、世俗の孝なる故に真実の恩を報ぜず。或は仏教に依りてたまたま孝順を行ずれども、自力の諸善に廻する故に父母生死を出でず。我も亦誠に恩を酬いず。爰に我等人界の生を受けて、仏法に結縁すと雖も、歴劫迂廻の道に趣き、聖道難行の人身とならましかば、順次の往生を遂げず、真に父母の恩を報ぜざらまし。

幸に今易行念仏の法味を聞き、頓教の道に入りて、三業を仏体と転ぜられぬ、二親も同じく転じて四八の妙果を顕さん。忝い哉。父母の恩徳に依りて無上の法財を得たり。梵摩^③達は難行苦行して八千歳師に奉事して、一たび念仏三昧を聞きて高明智に入りぬ。今我等は一時一日の奉事を致さざれども、遂に往生して無生忍を証す。是れ総て今生の父母の恩に非ざらんや。然るに縦令父母謬ちて泥梨^{なんり}の

① 恩「恩得」

② 道「路」

③ 梵「なし」

『観念法門』に引用の『般舟三昧經』の文によりて補う。

重苦に沈むとも、撰取不捨の光は障り無く、山海の道遠しと雖も、普現の色身に漏ること無し。誠に是れ真実の報恩、最上の孝行なり。然れば『大縁経』^{註1}に云く「流転三界の中には恩愛断つこと能はず。恩を捨て、無為に入るは真実に恩を報ずる者なり」と云へり。我れ此の三心を発して仏体と相応し、弥々知恩の心を抽んで、現在の父母をば冬夏に寒熱を防ぎ、晨昏に給仕し尽し、両肩に担ひ、便利を忍び、薪を拾ひ水を汲み、身命を惜まず、財宝を投げ捨てて孝養を行ずべし。然れば道紀^②と云ふ人は母に孝するに荷ひて自ら不浄を除き、榮好^③と云ふ人は、我が食を分ちて母儀を養へり。是れ則ち仏法の恩を思ひ、弥々二親の徳を重んずるなり。今我等何ぞ孝順を行ぜざらん。先亡爺嬢^{せんちやじょう}に於ては、血涙を流し、墳^{はか}に庵^{いほ}を結び、誠を至して、日夜に念仏、誦経、恵み等を至し、朝夕^④に追孝の報謝を抽んずべし。然れば則ち存亡共に孝行を致す可し。仍て釈尊は正覺を唱へて菩提樹下に坐し玉ふ時、父母は得脱を得玉へりと雖も、恩

註1

『大縁方便経』の略称か。但しこれには今の文は見えない。今の文は『清信士経』の偈文にある。

① と云へり。なし

② 道紀とは……不浄を除き「道紀云孝、母、荷、除、自、不、浄、」

道紀は中国北齊(高齊)の頃、鄴(河南省)の近郊に住んだ成実論の学者。高足の弟子が学成りて後、師に對する礼をわきまえざるにあり、「吾、成実論を講ずること三十餘載を積ぬ、正道を開悟して功夫有らんことを望めり。解は本と行に擬ず、斯れ遺識なり。今解して行ぜざらば還つて根本解せざるが如し。徒らに前功を失して終に後利無し云云」と多くの弟子と分れて獨居し、金藏論を作つて、これを以て民衆の教化に當つた。鄴の郊外を巡廻して民衆教化に出動するに、自から教化用の材料と老母とを荷なつて出かけて、老母の世話の一切は自からしめてはさせなかつた。詳伝は『続高僧伝』卷第三十にある。西山上人が道紀伝の一節を引用され、たには深い意が察せられる。

③

榮好は『永好』
榮好は我國奈良朝の末期に大安寺に住んだ学僧、勤操の学友である。伝は『三宗義論』中大安寺榮好の事。その他恩勤、住心、長明の『発心集』卷第九、鴨

④

夕。なし

徳厚く、重ねて報謝の為に忉利天とうりてんに往て、摩耶夫人の為に『報恩経』を説き玉ひ、迦毘羅城に赴きて浄飯王の為に、念仏三昧を説き玉へり。剩へ金棺を金色の御身に荷ひて三千（世界）を動じて、香炉を前路に取つて行きたまふ。総じて滅後の衆生の孝養を行ぜ（ざら）んことを哀しみて（孝順を行ぜよと）勸めたまふ者也。（故に）世・戒・行の三福は孝養を本体とす。去・来・現の三世の諸仏は孝養を以て成道し玉ふ。六八弘誓の願も孝養より顕れ、九品の正行も孝養より成ず。然れば「孝養父母とは廻向を教へて、為に西方快樂の因を説くことなり」と云へり。此れを孝の終として、此くの如く随喜して孝順の心を発すを廻向発願心と言ふ也。

所詮上来三心の義、言繁しと雖も、至誠心は正直の心、莊らざる心にて、雑毒虚仮の行は浄土に生ぜずと知るを、能発の心と言ふなり。此の故に所発の三業眞実なるを至誠心といふ也。深心と云ふは、眞実深信と言ふて、而も願力に収め取りて、正定之業南無阿弥

① も「は」

② 然れば「なし
異本には「然れば」ある。

③ るを「て」
④ と「を」

陀仏往生の体と信ず。廻向と云ふは、上に捨つる所の雜毒虚仮の諸行皆悉く願に依りて得生の因と成り伏しけりと随喜す。是の如く三心と分別すれども、帰命の一心と極まる。此の心を撰取するを阿弥陀仏と云ふ。故に釈註1に云く「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に時節の久近を問はず、念念に捨てざるもの是を正定の業と名づく。彼の仏の願に順ずるが故に、若し礼誦等に依るをば即ち名づけて助業と為す」と。

第四に念仏を行ずるとは

〔此正今經所詮行体而所説下品下生口称行相也雖能詮文広ト所詮行体唯此一行也其口称者雖無顯文探レハ一願意一心専称本意也〕

仏の因行果徳の行体我等を隔て無く成就したまう故に、我等③無際より已來の不善総て願力に依りて皆悉く（眞実の善として）成就す。故に釈註2に云く「三心既に具しぬれば、行として成ぜずと云ふ事な

① リ「し」

註1 散善義
深心釈の文

② 側註「註五十四字異無シ此觀門
鈔ノ文也」

③ 我等「我等を」

註2 散善義

し。願行既に成して、若し生ぜずば是の処り有ること無し」と云へり。其の所成の行は何ぞと云ふに、（南無阿弥陀仏是れなり。この名号は）三業門出入の体として、助正相離るゝこと無き故に、現身に六道の因行を閉絶して、永く常楽浄土の要門を開く。是の故に長時別時に通じて退転あること無し。尚ほ六道の戸を閉じて、浄土の門には未だ至らざる中間に居せる故に別時と云ふ。是の故に臨終平生の差別無し。此の義を以て、未だ死せざれども弥陀会の中に在りて観音・勢至友と為りたまふ。之を知らんが為に、道場を莊嚴して別時を行ずべし。

其の別時と云ふは、一日七日、父母逝去の日において三業清浄にして一心に念仏す。三業清浄にすといふは、身は即ち仏身^②と隔て無く、能礼所礼無二なる故に、此の身を以て云何んが殺生・偷盜等の不浄を行ぜんと思ひて、浴水し浄衣を着すべし。是れ則ち恭敬修なり。口は是れ弥陀出入の口なる故に清くす。即ち恭敬修なり。意は

① 平生「なし」

② 仏身と「なし」

③ 云何んが「云行」

④ 偷盜「偷盜・姪妾」

⑤ 行ぜ「清」

⑥ 口「側註「口字異作只非」

即ち仏の御心と隔て無しと憶へば、是の仏を以て何んが貪・瞋・邪見の心を発さんと憶ひて、心と声と相統し、念念見仏の想を成して、三十二相八十随形好、端正無比にして心眼の前に在りと思ひて、声絶ゆること勿れ。

次に長時念仏を行ずと云うは、三昧道場に入らざれども、出家の人に於いては姪・盜・殺・妄を犯さず、酒肉五辛を服せず、常に身心を潔くして念仏を行ずべし。在家の男女に至りては、国城をも捨てず。妻子をも畜へ、君に事へ私を顧る故に、日夜の縁務間ひま無くして三業不淨なり。然りと雖も常に念仏を行ずべし。是れ念仏は正定の業、無能碍の体、清淨宝珠の名号なる故に、貪瞋にも穢されず、妄念間無くして自ら念ずる心無けれども、無碍光仏の徳を具し、不断光仏の徳を備へる故に、障へられず、不捨の願体歴然たり。定散の依正をも心に係けず、厭欣に心無く唱ふる念仏も、妄念遊戯に唱ふる念仏も、正定業の名号なる故に、上の別時と差別無く、往生の

①と憶ひて＝なし

②念ずる心無けれども「念ん無心」

体は是れ一なり。然れば、機は善惡と替れども、願体は別なる事なし。故に大利無上の功德と云へり。

仏の大悲心の忝きことを想へば、因位の昔、身をば諸の苦毒の中に止むとも、我が行は忍んで悔いじと誓い給いし御誓願、我等が罪障を隔てたまはずと思へば、誠に弥陀の願力の功德貴き心起り、亦釈迦如来此の事を教へたまはずば、争か凡夫往生を遂げんと想へば、世尊の恩徳も謝し難し。故に『法事讚』に云く「悲喜交こもじも流れて深く自から慶ぶ、釈迦仏の開悟に因らずんば弥陀の名願何れの時にか聞かん。仏の慈恩を荷ひて実に報じ難し」と云へり。然れば連劫にも身を摧き、畢命を期と為し、涙を流して二尊の恩を悲かなしむべし。

此の心起らば、^⑥ 仏の制し玉へば、恣に惡を造らじと想ひ、縁に随ひて犯す所の罪障を悔いて、懺悔の心を発すべし。「念々に称名して常に懺悔せよ、人能く念仏すれば仏も還た念じたまふ」と云へり。

① 替「異」

② は「を」

③ 教「説」

註1 『法事讚』

下卷の讚偈の文

④ 弥陀の……聞かん「なし

⑤ を荷ひて「なし

註2 報謝の情の切なるかたち。

⑥ らば「るを」

⑦ 制「側註「異御座」

⑧ と想ひ縁に随ひて「想隨縁」

亦妄念^①発りて制伏し難き時は、妄境を便りとして、責めて厭欣を
 発すべし。若し財宝を思ふ時は転じて念を極樂の七宝に懸けよ。飯
 食^②を貪る念の発る時は、心を百味の菓食に寄せ、衣服を想はん時
 は、心を自然の法衣に懸けよ。寒熱を憂ふる時は、温涼の和国を欣
 ひ游戲を望む時は聖衆の逍遙せる事を想へ。管絃歌舞の調^③には、莊
 嚴伎樂^④に心を澄すべし。華を見る時は想ひを七重宝樹の華芬に懸
 け、月^⑤を詠めては常に満月の尊貌を想ひ遣れ、是の如く樂に逢ふ時
 は七宝樂邦の楽しみを（思ひ欣心を）発して念仏し、苦に逢ん時は
 三途八難の苦を思ひ出して厭心^⑦を発して念仏を行すべし。然れば力
 に任せ、機の堪えんに随ひて、行住坐臥を問はず念仏すれば、識あ
 がり神^{たましいと}飛ぶ機の上に、現身に見仏するなり。其の見仏の体と云ふ
 は、南無阿弥陀仏の名号なり。然れば善惡の衆機簡ぶことなく、長
 時に替ること無き見仏なり。是の故に、行者は畢命を期と為し、念
 念相續して中止すること勿れ。『般舟讚』^{註1}に云く「普く衆生を勸む、

① りて「は」

② 食「なし

③ 調「側註「異調」

④ に「の」

⑤ 月「日」

⑥ れ「り」

⑦ 厭「なし

註1 『般舟讚』。

地獄の因業を作ること、誠められた讚文の結びの偈

三業を護るには、行住坐臥に弥陀を念ぜよ。一切の時の中に地獄を憶ひて、増上の往生心を發起せよ」と云へり。是くの如き行者は、十は即ち十生じ、百は即ち百生ず。

是の故に作願心を深くして大悲を発し、縁①に随ひ機にふれて苦の衆生を救ひて浄土に生ぜしめんと想ふべし。然りと雖ども穢土にては三明六通を得ざれば利他の行願果し難し。早く浄土に生れて、天眼を得て苦の衆生を見て救はんには如かず。天耳衆苦の声を聞くことを得て之を導き、神通を得て十方に行きて衆生を引接し、之に依りて利他の行願を円満して、終に仏果註1に到るべし。故に「苦の衆生を救摂せん、虚空法界も尽きんや、我願も亦是くの如し」と云へり。是の如き等の自利利他の行願は併しかしながら南無阿弥陀仏の一行に依りて成就する故也。

第五に念仏の益を明すとは

上の念仏を修行する人は、現生に即ち延年転寿して九横の難に遇

① 縁に随ひ機にふれて「随縁機」

註1 『往生礼讃』 発願文の一節

② を救摂せん「なし

③ ら「て」

はず。故に經註1に云く「若し念仏する者は、当に知るべし、此の人は是れ人中の芬陀利華①なり。觀世音菩薩②、大勢至菩薩其の勝友となる。当に道場に坐して諸仏の家に生ずべし」と云へり。又釈註2に云く「芬陀利華とは人中の好華と名づけ、亦希有華と名づけ、亦人中の上上華と名づけ、亦人中の妙好華と名づく。此の華相伝して蔡華と名づくる是れなり。若し念仏する者は、即ち是れ人中の好人なり。人中の妙好人なり。人中の上上人なり。人中の希有人なり。人中の最勝人也」と。二尊④の護念を蒙りて五種の嘉譽を流さん。

然るに官位福祿は是れ一旦の榮へ、誠に上上人に非ず。千乘万騎は夢中の莊ひなり、実に最勝の守護に非ず。今念仏行者に於いては現生に無量劫の罪を滅し、現生に阿弥陀仏を見奉るべし。

註1 「觀無量壽經」流通分の文

① 芬「分」

② 觀世音……道場に坐して「乃至」

註2 散善義

③ 側註「此下異本釈引文甚略也」

④ 二「三」

二尊は觀音・勢至をさす。

又、釈迦、弥陀を二尊という。

⑤ 福「なし」

五段鈔 尾

文政四年辛巳夏六

皇都西奥海印

常光寺藏